

幼稚園 4 歳児の対人葛藤場面における協同的解決

○松原 未季・本山 方子

（奈良女子大学大学院人間文化研究科・奈良女子大学研究院）

〈問題と目的〉

本論文の目的は、幼稚園 4 歳児における対人葛藤は、当事者の幼児の他に当事者以外の幼児や教師を巻き込んで、どのように協同的に解決されるのかということをも明らかにすることである。

従来の対人葛藤研究では、葛藤の当事者である幼児における社会性の発達が期待されてきた。しかし、対人葛藤は葛藤の当事者のみで展開されるとは限らず、当事者以外の幼児（以下：非当事者の幼児）も葛藤に介入する可能性がある。従って、当事者だけではなく非当事者の立場から葛藤を経験することも幼児の社会性の発達に大きな影響を及ぼすと示唆される。

以上のことから本研究では、協同性の育ちに進展が見られる 4 歳児を対象とし非当事者の幼児の葛藤場面への関与に焦点を当てて、4 歳児がどのように協同して葛藤を解決するのかについて検討する。

〈方法〉

関西圏にある公立幼稚園の 4 歳児クラスに在籍する園児 30 名（男児 15 名、女児 15 名）及び担任教師 1 名を調査協力者とした。2011 年 6 月から 12 月上旬まで 17 回観察を行った。主に対人葛藤場面を観察し、記録は園児と担任教師の発話と言動を筆記及び IC レコーダー録音によって採取した。調査時の記録をもとに、園児と教師の行動、発話、表情について詳細な文字記録を作成し、それを分析資料とした。詳細なエピソード記録を作成し、解釈的分析を行った。

〈結果と考察〉

葛藤場面は、主におやつや席決め場面や自由選択遊び場面で観察された。全葛藤場面 48 事例のうち、第三者が葛藤に関与したのは 34 事例であった。そのうち、教師のみが関与した事例は 13 事例、教師と非当事者の幼児が関与した事例は 10 事例、非当事者の幼児のみが関与した事例は 11 事例であった。

教師のみが関与した事例では、教師が主導して葛藤が解決されたが、幼児も〈他児の葛藤を見つめる〉、〈「どうしたの？」と声をかける〉といった他児の葛藤への気付きを示唆する行動が見られた。

次に、教師と非当事者の幼児が関与した事例では、〈当事者の幼児に代わって教師に葛藤時の状況を説明する〉、〈教師に他児の葛藤を解決するように求められて、葛藤を仲裁する〉といった行動が見られ、他児の葛藤により効果的に介入できていた。これらの介入の仕方は、教師のみによる関与で見られた幼児の他児の葛藤への気付きが、実際に他児の葛藤場面に働きかける行動へと発展した結果生じた、と思われる。

非当事者の幼児のみが関与した事例では、〈加勢（一方の味方をする）〉が多く観察された。加勢では、非当事者の幼児は親しい方の幼児あるいは不利な状況に陥っていると考えられる方の幼児のみに有利な介入をしていたため、当事者双方が納得した上での葛藤の解決は困難であった。

また、一部の幼児ではあるが、〈仲裁（両者の要求を理解した上で問題を解決へと導く）〉も見られた。非当事者の幼児は、加勢の場合とは異なり、当事者双方の要求や葛藤時の状況を把握し、当事者双方が納得し得る形で問題を解決していた。従って、仲裁は葛藤を直接的に解決へと導ける最も高度で効果的な介入の仕方と言える。

以上のように、4 歳児は他児が直面する葛藤に対して自らができることを発揮し始めているが、仲裁のように葛藤を直接的に解決へと導けたのは一部の幼児のみであった。仲裁ができた幼児としてはハルカとテイタが挙げられる。ハルカは日頃から他児の誤った行動を注意したり、教師による他児の葛藤場面への対応に関心を抱いていたため、仲裁することができた、と考えられる。それに対して、テイタは、自己中心的な言動が際立ち、クラスでは問題児として認識されていた。しかし、一見自己中心的とも思われる言動を方略的に用いることによって他児からの反応を確実に得るという高い相互コミュニケーション能力を備えていたために、他児の葛藤場面にも効果的に介入できた、と思われる。

このように葛藤を自ら積極的に解決できる幼児が、率先して他児の葛藤場面に関与すれば、それを模倣して葛藤に関与できる幼児も存在した。それ故、クラスに少数ながらもこのような幼児が存在すれば、彼らの影響で他児もより高度な葛藤への介入の仕方を学び、葛藤を協同で解決する集団が育つことが期待される。